

はじめに

「娘の気持ちがつかめない」

「親や大人は私の気持ちをわかってくれない!」

そのようなことで悩んでいる世の父母や、娘たちが多くいます。

また、父母との関係のなかで悩んで、それが自分だけの悩みであるかのように思い込んでい
る少女たちも多くいます。

私はそのような方々の気持ちに応えるために、15歳少女たちの多くの作文をまとめてこの本を
つくりました。作文は、私が学校で担当した教科で生徒たちに書いてもらったものです。

私は横浜市内にある私立高木学園女子高等学校で、今年3月まで公民科の科目を主", "おも
に1年生に教えていた者です。テストや夏、冬休みの課題として作文を書いてもらい、17年間
『イチゴ便り』などと名づけた教科通信としての文集を発行してきました。1冊は30ページたら
ずで30人ほどしかのせられませんが、毎年4、5号発行しましたので、全部で70冊を超えまし
た。そこにのった生徒の数は全部で2300人近くになります。

その文集は、だいたい、自分自身、友人、家族・家庭、身近な社会のことという項目でまとめま
した。発行するごとに生徒たちはとびつくようにして読み、次号には自分ののをのせてもらいたいと
思う者も多く、一生懸命に書いてくれました。私を信じてくれ、本音の生々しい気持ちをうちあげ
てくれるのは、私のなによりの喜びでした。読后感想文を書いてもらいますと、そこに書かれて
いる人の心や行動への共感や感動の気持ちなどを伝えてくれました。

青年期をむかえている少女たちの多くは、ふだん、にぎやかにしゃいでいたとしても、本音で
友だちなどと会話をしにくく、意外に孤独なのです。ところが、悩みを自分だけのものと思ってい
たところ、この文集を読んでみて自分と同じ思いにふれ、“悩んでいるのは自分だけじゃなかつ
た”ということで、心の救いになったようです。「『イチゴ便り』を読んで、登校拒否をせずにすん
だ」とか、「自殺せずにすんだ」という心からほっとすることを書く者もいました。そこで、『イチゴ
便り』を“バイブル”“心の教科書”“名もない相手への心の伝言板と形容してくれる者もいまし
た。また、特に印象に残った作品を書いた者へ、親しみをもったの温かい手紙の形で書いてくれ
る者も多かったです。さらにこの文集は、むずかしい年代の娘を持つ父母にも、その本当の心を
つかむ参考になるということで、とても好評でした。

世の大人たちの目には、少女たちがチャラチャラとしていて、ものごとをあまり深く考えず、心が通じあえないものと映りがちです。しかし、それは激しい競争社会に生きるためのポーズにすぎず、案外、少女たちは内面ではいつの時代にも通じる真実にふれる心を持っているものです。読后感想文のなかに、「ふだんアイドルなんかの話ばかりしていても、心につきささることを書いてたりして……自分のおかれている立場をしんげんに受け止めていることがよくわかりました」というのがありました。これが現代の普通の若者たちの心を象徴しているのではないのでしょうか。

今回、出版の運びとなりましたこの本、『思春期少女達は家族をどう見ているのか』には119編の作文をのせました。それらは、1990年から今年3月までの約50冊の『イチゴ便り』に家族・家庭をテーマにしたものが300点あまりあり、その中から選んだものです。最初の年度のものと最近のものには13年間の年数のへだたりがありますが、少女たちの内面にあるものは少しも変わりはありません。親子の関係のなかにある問題はいつの時代でも根元では同じなのだと思います。

私は、数多くの作品に目をとおしてみても、いろいろなことがあらためて見えてきました。

横浜市、川崎市、相模原市、東京都下の町田市などの首都圏近郊の広い範囲から集まっている少女たちの一つひとつの作品は、それぞれ自分の家庭の現状の報告なのですが、総合してみますと、現代の日本の家庭の姿が浮かびあがりました。そのなかには両親や祖父母などもそろったごく平穏な家庭もありますが、たしかに、核家族、父母の離婚、子供への虐待、家庭内暴力、家庭崩壊などの問題も横たわっていました。この本の作品群のなかから、父母などのみなさんは、「これはうちのケースとよく似ている!」と実感される作品を見い出されることでしょう。また、同年輩の少女のみなさんは、「へえー、これ私とそっくり!」と共感する作品を見つけられることでしょう。

次いで、多くの作品にふれてよく見えてきたことは、現代のむずかしい時代に苦悩に満ちた青年期をすごしている少女たちに自立への道を歩ませるには、どのような母親や父親などのありかたが望まれるかということでした。この本の「あとがき」では、そのことをくわしく考えてみました。

少女たちの作品には、家族愛に満ちた心温まる感動的なものもありますが、嵐のような叫び声が聞こえる作品の多いことにおどろかされました。なかには、父親をいやがって避け、「どっかに行ってほしい!」「消えてほしい!」「死んで!」とまで思う者がいたり、母親に「うっせな。黙っているよ。てめーに言われたくねーよ!」などとののしったりしている者もいました。それらは普通に学校

生活を送る少女たちのものなのです。そういう親への思いや言動は本心から出たものなのではないでしょうか？ 特に父親に対するシビアな作品が多いのはなぜでしょうか？ それらの疑問への答えも少女たちの作文を通じて「あとがき」で考えてみました。

私は、この本から、世の親のみなさんには、むずかしい年代の娘さんの複雑で微妙な心をつかんで、家庭内教育の良いありかたを考えていただき、十代の少女のみなさんには、同世代の人たちへの共感と、親との関係のなかで暗くたちこめていた心の霧を晴らすヒントを得ていただきたいのです。また、世の多くの方には、少女たちの気持ちをわかっていただき、温かくその成長を見守っていただきたいと思います。つまり、私はこの本を通じて、自立への道の出発点に立ったばかりの少女たちのために、みなさんと共に微力ながら役立たせていただきたいのです。そして、この本が問題行動を少女たちに起こさせないようにするための心のノウハウをしめすものの一つになればとひそかに願っています。

最後に、私にこの教職活動の機会を与えていただいた高木学園女子高等学校とその生徒たち・同僚の人たち、そして、本書の出版に向けて、多大なご指導とご助力をくださったあけび書房代表の久保則之氏に心から感謝を申し上げます。

2003年12月11日 編・著者 平井 尚一